

第 6 5 回学習会を、平成 2 8 年 6 月 3 日 (金) 19:00~20:00 福翔高校にて行いましたので、報告いたします。

第 6 5 回の内容

講師 重枝一郎先生

アクティブ・ラーニング (AL) の 3 本柱

1 授業改善で意識したこと

(1) 授業の基礎的条件 学び合う関係・学習規律・ラーニング・ピラミッド

(2) 開発的生徒指導

(3) 授業の内容的条件をふまえながら

目標共有・振り返り 波及効果 学習形態

2 アクティブ・ラーニング (AL) の 3 本柱

主体的な学び 対話的な学び 深い学び

生徒の実態 横断・総合的 人権教育の視点 道德教育



アクティブ・ラーニング (AL) の 3 本柱

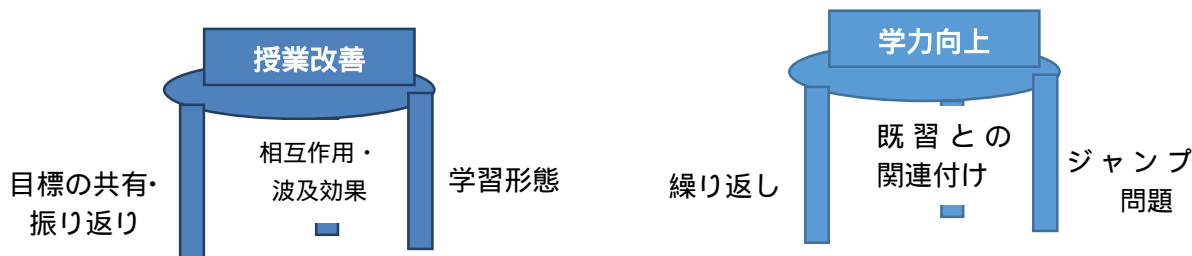
1 教育活動は連動させて総合的に取り組む

■ 平面は 3 点で決まる (ないと成り立たない、積み上げの絵との違い)

キャリア教育の研修会から・・・



2 授業改善で意識したこと



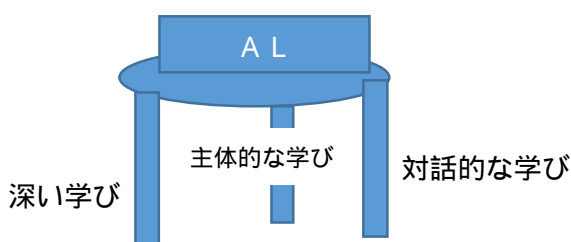
・長年、アクティブ・ラーニング型授業を実践する中で、テストのスコアは徐々に上がり (知・理)、さまざまな活動と生徒指導の波及効果は高い (思・判) (関・意・態) と実感してきた。但し、すべての授業でアクティブ・ラーニングを行ったわけではない。それよりも、連続性、総合性が大切だと考えていた。授業の方法は多様でも、目標の一体感を各教科担当、各部活動顧問、各分掌担当と共有できるかどうかポイントだと考えていた。

- ・「個人→グループ→全体→個人」という授業の流れの中で、「助けてもらう力」の意義を肯定的に捉えられるようによく話していた。
- ・「助けてもらう力」は、教師にも当てはまることである。そもそも教師は「助けて」「できない」「わからない」を言うと、専門家として恥ずかしいと考える。つまり、A Lのキーワードでもある「協働」ができていない。結局、生徒指導においてもこの「協働」ができないことが問題を難しくしている。すべてを関連付けて考えることがA Lをする意義になる。(相互作用・波及効果)
- ・3つの柱を関連付けて意識していくことで、学校教育活動全体に波及効果がある。また、教師の同僚性も高まる。

(「助けてもらう力」について、クラスの間関係づくりの基盤の話でしておく)

「助けてもらう力」の根底には、なんとか生き延びよう、解決しようとする生命力がある。最初は自力でしようとする。
自力で難しいと思ったら、次に助けてもらっても解決すべき問題か、自力でどこまでできるか、誰に助けてもらうかなどを判断する。
助けてもらえる関係を築いておくことも必要である。
「助けてもらう力」を身に付けておけば、学校を、人間を好きでいられる可能性は高まる。

3 効果的なALについて (中教審「論点整理」参照)



- ・A Lは主体的、能動的、協働的がキーワードになっているが・・・
- ・そうすると講義形式ではない授業を目指そうと考える。そして、グループ、ペア、ICT活用等が具体的な形として実践される。しかしながらそれで本当にアクティブ・ラーニングになるのか？
- ・逆にA Lに対して指導法を一定の型にはめることにならないかといった懸念もある。
- ・型がなければ「形無し」であり、型を知り、その型を破り、やがて離れる(守破離)これが「型破り」ということになる。型を破るとは、その場に応じて対応できる自己の確立をめざすことになるが、まずは型を実践しなくてはならない。
- ・教科の授業においては「説明型授業」がひとつの型であり、A Lのような「問題解決型授業」は徐々に融合させていくのがよい。なぜならば、教師に一定の経験がなければ、生徒の多様な考えに対して処理できない。
- ・教師が主体的、対話的について取り組もうとするとき、学習の形態に目がいて、学習の状態に着目できているか？つまり、生徒がその気になって取り組んでいるかどうかのポイントになる。そして教師は実践してみてどうだったか(資質・能力が付いているのかを評価)をいつも考えながら・・・
- ・見た目の「アクティブ」にとらわれすぎていないか？「深い学び(各教科の見方・考え方にあたる)」を妨げてはいないか？
- ・「対話的な学び」を通してから「深い学び」をしていることもある。この3つは切り分けられるものではない。だからバランスを常に考える必要がある。
- ・「深い学び」とは概念や原理を理解することではなく、他者に説明したり、新しい認識を作り出したりするという、概念と具体の往還が大事である。
- ・A Lにおいても実は教師自身がアクティブ・ラーナーになる必要が大きなテーマであり、これまでの授業は教師にとって「アクティブ・ティーチング」であり、教えられ上手な生徒を育成していた節がある。

- ・教科ごとのアクティブ・ラーニングの方法を教師は求めている。しかし、それには違和感を覚える。それは、教科横断的でないからである。私自身は教科横断的というのはなかなか難しく感じたので特別活動（GWT）や道德の時間（モラルジレンマ）、生徒指導（部活動での指導）において横断的に実践していた。例えば、道德と数学での問題解決学習等。

○ A L を取り入れた道德授業について（「読む道德」から「考え議論する道德」）

『道德科における問題解決的な学習は、生徒一人一人が生きるうえで出会うさまざまな道德上の問題や課題を多面的・多角的に考え、主体的に判断し、よりよく生きていくための資質・能力を養う学習である』

↓

主体的に取り組むために、対立している（ジレンマ）問題を取り上げる

- ┌ 「寛大な心をもって他人の過ちを許す（相互理解・寛容）」
- ┌ 「法やきまりの尊重で自分勝手な反発を許さない（規則の遵守）」
- ┌ 「理解し合い、信頼や友情を育む（友情・信頼）」
- ┌ 「同調圧力に流されない（公正・公平・社会正義）」

↓

発問の工夫

- 「その解決策を行った場合、結果としてどうなる？」（因果関係）
 - 「相手の立場から考えると、この解決策は公正・公平か？」（可逆性の追求）
 - 「誰もが同じように行動したらどうなるか？」（解決策の普遍性を探求）
 - 「その解決策で利害関係者がみな幸せになれるのか？」（互惠性の追求）
- 多面的・多角的

↓

学習形態の工夫

- 「対話的学び」グループを活用し、全員参加型にする（A L）

↓

道德的価値と関連付けて省察

- ・自他を尊重し合い、責任のある発言をする、相手の話を傾聴する、共感的に理解しあう【道德的体験】
- ・異なる意見を出し合って互いに認め合う、納得し合える形で合意形成する【道德的判断力】【道德的心情】

さまざまな課題や問題を主体的に解決する学習になっているか？（A L）

これまでの認知的側面だけでなく行動的側面も重視（A L）

小中学校の道德科は、高校での新教科「公共」に矛盾なくつながっていく（判断して解決する力、他者との関係性をつくる力）

4 その他

- 「3つの善」の話
 - ・法律上の善・道德的善・宗教的善
 - 3つの善を物差しに「電車通学の子どもの4つの行動」（行動的側面に結びつけて）
- 「したいこと・しなければならないこと」の話

生徒指導に関すること（保護者対応）

	保護者	教師	対応
0 次の接触（思い）	不安や不満 孤立や孤独 生きづらさ	いいかげんな応答 無反応	担任
第1次対応（クレーム）	クレーム ミスの批判	身構える姿勢 嫌悪感	学年 生徒指導担当
第2次対応（トラブル）	とげとげしい物言い ストレス	驚きと狼狽 自信喪失 過剰防衛	管理職
第3次対応（紛争）	憎悪と批判 拳をおろせない 過去のトラウマ		教育委員会 第三者機関 訴訟

「0次対応」といったレベルでの受け止めや接触が基本。

問題が起きる前に関係性を高める努力は必要。先手必勝，後悔先に立たず。

2，3次段階に発展しても，結局0次に戻って考えることになる。

「全体に厳しく，個々に優しく」理解してもらうために，学級通信等で開発的生徒指導とキャリア教育の視点をもった発信をしていく。

5 演習 「ごみコミュニケーション」(GWT コンセンサス実習)

ねらい

コミュニケーションについて学び、他者の価値観を受容する態度を育成し、自らの価値観を再認識する。

内容

ある都市の住民1世帯（平均2，2人）あたりの1週間のゴミについて何が多いかを考えて順位をつけます。この課題には答えがあります。

やり方

課題シートとグループ決定シートをひとり1枚配布する。

課題を理解して（説明を加えながら）自分の意見をまとめる。（5分）

個人の意見を交流し，グループの意見としてまとめていく。（20分）

グループの代表が発表する。（5分）

答えを発表する。（2分）

振り返りシート記入（5分）

振り返りシートの交流（10分）

留意点

- ・自分の価値観に固執する生徒，すぐに他人の意見に流される生徒，まったく議論に参加しない生徒，生徒たちの意外な一面を見つけることができるので、よく観察する。
- ・悩んでいるグループは激励し，ヒントを与えてもよい。

課題

- ・プラスチック類（トイレや柔軟剤の容器等） ・石，陶器類（茶碗やコップ等）
- ・紙類（新聞紙や雑誌等） ・繊維類（古着やタオル等） ・ガラス類（ビンやガラス等）
- ・金属類（空き缶やアルミはく等） ・台所ゴミ類 7種類

7種類の重さの内訳（kg）

3，00 1，04 0，65 0，49 0，43 0，38 0，17

7種類の重さを選び，重い順に答えましょう。自分の意見が決まったら，グループで話し合っって順位を決めます。

全体像を描いて実践する

風土会では、過去の実践ではなく、リアルタイムで「今」実践していることを先生方に発信しています。それを、参加された先生方は、どのように自分の日常の教育活動に関連付けていくのかを考えてください。

「アクティブ・ラーニング」と一言と言っても、温度差があります。大学が変われば、高校が変わります。小・中学校では、「アクティブ・ラーニング」を意識せずとも、今まで実践していました。しかし、高校だけがブラック・ボックスになっています。そこで、県で指定校をつくって「アクティブ・ラーニング」に取り組んだり、校内研究のテーマにして、全職員に周知したりするようになってきています。

但し、「アクティブ・ラーニング」の本質を考えず、局面だけで捉えていても、筋の通った教育にはなりません。全体像を描き、様々な教育活動に関連付けるという発想が必要です。研究構想図のように、全体像を絵にすると、ビジョンを共有しやすくなります。

3本柱で考える

テーブルは、足が3本ないと立ちません。1本でもないと、使い物になりません。必ず3本、必要です。

キャリア教育を行う場合、海外では、行政と現場とスクール・カウンセラーがそれぞれ違う役割を担っています。その役割は、積み上げではなく、並列です。但し、日本と違ってスクール・カウンセラーの役割が大きく、進路指導を行うだけではなく、教師にも指導をします。教師の役割は、教科指導を行うのみです。

この図を見たときに、教育活動の全体像を示す絵として、他にも活用できるのではないかと考えました。そして、「授業改善」「学力向上」「アクティブ・ラーニング」について、3本柱の図を描いてみました。

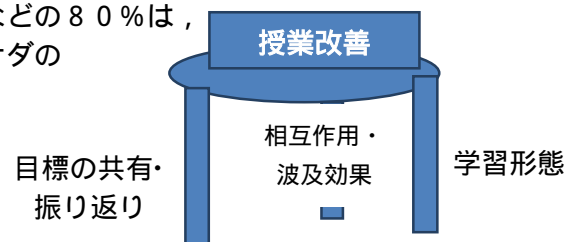
授業改善では、学習形態にこだわる

授業改善では、班形態で教え合う学習形態にこだわり、生徒が机をくっつけて生活する「意義」を追究していました。それは、「ピア・サポート」につながる実践です。ピアとは「仲間」という意味です。

「ピア・サポート」は、友達との関係や進路に関する悩みなどの80%は、生徒同士で相談し解決しているという調査結果をもとに、カナダのスクール・カウンセラーの活動として生まれました。

日本では、いじめを受けて悩む子、登校をしづる子、友達関係をうまく結べない子に対して、子どもたちが仲間として援助していく活動が注目され、普及されています。

しかし、理論ありきではなく実践ありきで、仲間同士の支え合いを促す方法として、班形態に取り組んできました。



目標共有と振り返り

授業で「めあて」を示すのは、目標を共有するためです。

教える側と教えられる側が目標を共有すると、効果は絶大です。教えられる側の意識を確認し、高める効果があります。また、活動をさせた後に「振り返り」をしないと、その授業がよかったのかどうかがわかりません。振り返りの積み上げで、授業の質が上がります。

意味面の振り返りは、「次にかうしよう」という自分の課題を自覚できます。

感情面の振り返りは、チャレンジしようとする勇気が生まれます。そして、学級全体への波及効果が生まれます。

助けてもらう力

ラーニング・ピラミッドからもわかるように、「他者に教える」と90%の学習定着率になります。

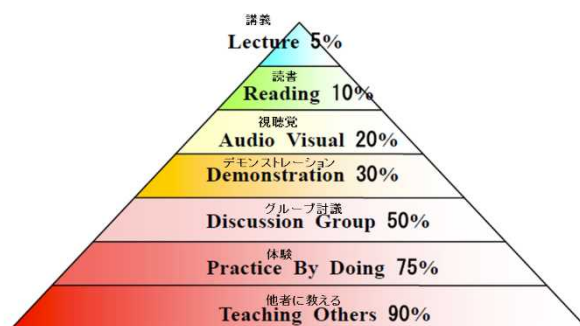
「教え合い学習」や「助け合い学習」があたりまえにできる雰囲気をつくるために、「助けてもらう力」が必要であることを、日頃から子どもに話しておきます。

「助けて」と言えるということは、あきらめていないということであり、人を好きになる秘訣です。「ありがとう」と感謝する関係は、人間関係をよくします。

グループ学習やペア学習が機能するためには、人間関係が左右します。それは、人権感覚を養うことです。人権感覚を養うのは、毎日の授業でできることです。教師の中に、教科の授業で、道德教育や人権教育を行うという意識があるかどうかで、教育効果が変わってきます。

学習定着率「Learning Pyramid」

(出典：National Training Laboratories)



教員にも必要な「助けてもらう力」

登山家の言葉に、「一番めんどうなのが教員。「助けて」と言えずに、大きな迷惑をかける」というのがあります。教員同士でも、すぐに「助けて」と言える関係があると、助けてもらっているのが相手を好きになり、人間関係がよくなります。子どもも大人も、同じです。

ALの3本柱

主体的な学び 対話的な学び 深い学び

まじめな教師はすぐに、「形」に走ります。アクティブ・ラーニングというと、講義型ではない授業を目指そうとします。しかし、学習「形態」に目がいて、学習の「状態」に着目できていなければ、それで本当に、アクティブ・ラーニングと言えるのかどうか疑問です。

「どのような資質・能力が身についているのか」「深い学びを妨げていないか」「浅い学びになっていないか」教師が自分に問いながら、バランスよく実践していきます。概念と具体の往還が大切です。

また、アクティブ・ラーニングを進めるうえでは、多様な考え方に対応できる教師の力量が求められます。そこで、教師自身がアクティブ・ラーナーになる必要があります。

「3つの善」の話

ある僧侶の講話。「善」には、3つのものがあります。第1は「法律上の善」です。決まりを守っていれば善ということです。第2は「道德的善」です。どのように行動するべきかの判断を自ら行い、行動するということです。これは、学校教育で学習していることにつながります。第3は、「宗教的善」です。自己中心性を捨て、他者の幸せを求めていく心です。この3つの善を物差しに、電車通学の子どもの行動を観察するとどうなるかを考えてみました。

シルバーシートが空いていれば座ってゲームをする子ども、規則だからシルバーシートには座らないが普通の席には座りお年寄りにも席を譲らない子ども、普通の席に座りお年寄りを見たら「どうぞ」と声をかけ席を譲る「道德的善」の子ども、一般の席が空いていても座らない、若者は座るべきではないという「宗教的善」をもつ子ども。生徒にこんなたとえ話(感話)をして、考えさせるのはどうでしょう。

「したいこと・しなければならないこと」の話

サッカーの小学生の大会で話をすることがありました。大好きなサッカーの大会なのでキラキラした目で私の話を聞いていました。ちょうど夏休みということもあり「したいこと」「しなければならないこと」について話しました。サッカーでは「したいこと」は主に、攻撃面の想像力や積極性に例えることができます。「しなければならないこと」は守備面の規律、まじめさや忍耐に例えることができます。この両方がある選手でないと魅力的な選手ではない・・・では、これを日常の生活に置きかえて考えるとどうでしょう。「したいこと」はサッカーでいい。「しなければならないこと」は宿題、掃除等々・・・これを子どもたちからの発言を引き出し、しっかりと約束をしました。その後、親御さんからたくさんのお礼の言葉をもらいました。

今回のキーワード

- アクティブ・ラーニングの3本柱・・・主体的な学び・対話的な学び・深い学び
- 授業改善で意識していたこと・・・授業形態にこだわる
- 教える方と教えられる方が目標を共有すると、効果は絶大
- 活動をさせた後に振り返りをしないと、もったいない。振り返ると次につながる
- 意味面の振り返りは、自分の課題をつくれる
- 感情面の振り返りは、チャレンジしようとする勇気をつくれる・・・波及効果が生まれる
- 連続性と総合性が大切
- 助けてもらう力＝人を好きになる秘訣
- 「助けて」と言えない教員。そして、大きな迷惑をかける
- 人権感覚は、毎日の授業で育む。教師の意識の中に「教科の目標」＋「人権感覚」があるか

♪ 学習会に参加された先生方の感想 ♪ （参加人数 25名）

- ・「アクティブ・ラーニング」について、言葉が先行してモヤモヤしていました。まだ、理解不足ですが、少しずつ意識していきたいと思いました。また、今日の重枝先生のお話を聞いて「振り返りをしないともったいない」と強く感じました。生徒の意味面、感情面をうまく引き出して、波及効果を狙っていきたいです。「ごみコミュニケーション」の活動も、機会があればやってみます。
- ・校内の研究テーマで「アクティブ・ラーニング」を行っていますが、学習形態にこだわりすぎていたなと今日の講義を聞いて感じました。自分の考えがブレていたところがあり、今日の参加で軌道修正ができました。ありがとうございました。波及効果を狙う取り組みなど、様々な教育活動の関連性をもう少し整理したいと思いました。
- ・校内の研究テーマが「アクティブ・ラーニング」なので、勉強中の内容でした。教科に特化して考えるのではなく、日常のすべての教育活動で関連付けていけるような、1つの大きな柱を自分自身でつくっていききたいと思います。「アクティブ・ラーニング」をしているつもりになっていないかということも頭に入れて、これからも勉強していきたいと思います。
- ・今回、初めて参加させていただきました。校内の研究テーマが「アクティブ・ラーニング」に関する内容で、これからどのような授業をしていけばよいかを考えていました。「アクティブ・ラーニング」というと、やはりどこかで、方法の工夫からと考えてしまっていたと感じます。小集団を交流させること、ICTを使うこと自体が目的にならないよう、あくまで生徒の思考や感情の状態に注目していかなければと思いました。また、「助けてもらう力」の話など、子ども達への語りの参考になりました。
- （「アクティブ・ラーニング」が校内の研究テーマになっている学校が多いのに、驚きました。授業を改善し、子ども達の力を引き出すためには、まず、教師が「アクティブ・ラーニング」について深く理解することが大切です。学習の形態ではなく、学習の状態に着目できているか。子どもにどのような資質・能力が身に付いているか。教師の働きかけは、子どもの深い学びを妨げていないか。講義型よりも浅い学びになっていないか。様々な視点で教師が自己点検しながら、自らアクティブ・ラーナーになる必要があります。ぜひ、風土会でアクティブ・ラーナー体験をしてください！！）
- ・9年ぶりに学校を異動しました。前任校では、風土会で学んだことが学校にだいぶん浸透していましたが、赴任した学校は、0からのスタートです。手始めに、聴き方（ボディリス・ハーリス）の授業を各学年でするところまでできました。ティーチャーズ・ティーチャーを何度も読みながら、自分のクラスでもGWTをやっているところです。今日の「アクティブ・ラーニング」の話も、自分ではしっかりやっているつもりでしたが、形式にこだわって、深い学びができていないのではないかともう一度、振り返ってみようと思います。また、活動をさせたら振り返りを徹底してやってみようと思っています。
- （今回の参加者のうち、7名が福岡市以外の学校から参加です。遠くから参加していただき、ありがとうございます。様々な学校で頑張っている先生方から、たくさんの勇気をいただいています。）